ラッキーナスビ2.5

綴られていく物語、また1ページ

『悠久』の体現

体育大会は続く

みんなで目指すことの意味

今年度の体育大会が終わった。有終の美を飾った。体育大会スローガン「悠久～それぞれのfamily storyへ～」を見事に体現した。「悠久」には「変わらず続くこと、果てしなく継がれていくこと」といった意味がある。これまで70回にわたって行われてきた体育大会の伝統を受け継ぎ、自分たちならではの要素を加味しながら、次の世代へつないでいく。練習中から本番まで、そんな気概に溢れていた。スローガンをはじめ、各ファミリーが掲げたヴィジョン、各クラスが掲げた目標は、みんなで目指すからこそ体現できるものなのだ。

≫美術部の生徒たちが作成したスローガン

完結しない物語を綴る

今年度の体育大会は、4月に行われた全体オリエンテーションから始まっていた。オリエンテーションで、体育大会実行委員長は「体育大会を体育大会で終わらせるのではなく、これから続く学校生活につなげてほしい。1ページ、1ページと物語を書き続けてほしい。」という想いを熱く語っていた。

≫閉会式であいさつする実行委員長

体育大会のふりかえりをする。よく出てくる言葉がある。「これからに活かしていきたい。」この言葉を実行に移すことの難しさを知っているからこその実行委員長のメッセージである。

体育大会で見つけた〈ナスビの売り方〉は、生徒一人一人に、様々にあったはずである。自分の体験をそのままにせず、言葉で整理して、経験（学び）に変えていくことこそ、「これからに活かしていきたい」を体現する最良の方法である。

体育大会を通して綴られた物語に、次はどのような1ページが続くのか。「前ページの学びが存分に活かされた、新たな1ページ」が次々と綴られていくことを期待したい。体育大会はいつまでも完結しない物語である。

今の僕たちは、どう見えますか

体育大会の練習中に発見した〈ナスビの売り方〉がある。

青団の3年生のリーダーが、赤団の先生にこう尋ねてくる。

「先生の目に、今の僕たちは、どう見えますか。」

その問いに対して、その先生は自分なりに思ったこと、感じたことを伝えた。

「ありがとうございました」と言い、その生徒は自分の団に戻っていった。

「今の僕たちは、どう見えますか」という問いは、自分たちの姿を、自分たち以外の人の視点から捉えることを通して課題を見つけたり、自分たちが気づけていない良さを知ったりすることができる非常に威力のある問いだ。それも、ライバルの団の先生に尋ねる。効果は倍増する。より客観的に見た視点から意見をもらえるからだ。

「今の僕たちは、どう見えますか」という問いは、体育大会に限って有効なものではない。これから始まる合唱コンクールに向けた練習でも、日々の学習への取組でも、委員会活動でも、同じように威力を発揮する問いだ。

人材育成の研究が進むなか、「今のあなたはこんなふうに見えるよ」というフィードバックの有効性が実証されつつある。この流れに合わせて言えば、他者からのフィードバックを〝待つ〟のではなく〝自分から取りに行く〟ことで、自分（たち）の成長をさらに加速させていくことができるようになるはずだ。この〈ナスビの売り方〉、いかがでしょう？